

平城京右京一条南大路とその周辺の調査

－平城第 530 次調査記者発表資料－

2015 年 4 月 30 日

奈良文化財研究所 都城発掘調査部（平城地区）

調査地：奈良市二条町 2－9－1

調査主体：奈良文化財研究所 都城発掘調査部

調査面積：3,591 m²

調査期間：平成 26 年 4 月 14 日～平成 27 年 2 月 18 日

* 現地はすでに埋め戻されています。

奈良文化財研究所は、本庁舎の建替に伴う発掘調査をおこなってきました。10 ヶ月におよぶ調査の結果、奈良時代に造られた一条南大路と南北両側溝を検出し、平城宮西面中門（佐伯門）周辺の様相を知るうえで、重要な成果を得ることができました。また、平城京造営時には、秋篠川旧流路を改修した斜行大溝を埋め立てて大規模な土木工事をおこなっていることがわかりました。

1. はじめに

奈良文化財研究所は、本庁舎の建替事業を進めており、旧庁舎の解体ののち、地下遺構の様相を知るための発掘調査をおこなってきました。奈良文化財研究所の旧庁舎は、奈良県立医科大学附属奈良病院（のち県立奈良病院）として昭和 37 年に起工したのですが、その際には発掘調査をおこなっていませんでした。このため、庁舎建替の計画立案の参考にすべく、平成 17 年度（第 400 次）と平成 25 年度（第 518 次）に試掘調査をおこないました。その結果、敷地の東北部で南北方向の条坊側溝（西一坊大路西側溝）を確認しましたが、それより西や南では、中世の遺物を含む秋篠川の氾濫原が広がり、奈良時代の遺構は残存しない可能性が高いと考えてきました。

解体作業や排土置き場等の関係から、調査は敷地東南部から開始し、新庁舎の計画地を中心とした範囲でおこないました。旧庁舎の鉄筋コンクリート製の基礎杭は、除去すると、地下遺構を傷つける可能性があったため、これを残したままで発掘調査を進めました。

発掘調査の進捗状況は、奈良文化財研究所のホームページに「奈文研本庁舎発掘だより」として逐次更新し、調査終了まで 39 回分を公表しています。また、すでに以下のような報道発表をおこないました。今回の発表は、これまでの発掘調査成果を総括的な視点でまとめたものです。

【過去の報道発表】

- ・平成 26 年 4 月 28 日：奈文研本庁舎建替に伴う発掘調査の計画について
- ・平成 26 年 7 月 4 日：平城京造営時に秋篠川旧流路を埋め立てた敷葉工法を確認
- ・平成 26 年 8 月 22 日：液状化現象等の地震痕跡を確認
- ・平成 26 年 10 月 2 日：秋篠川旧流路の埋め立て土に 8 世紀初頭の多量の切り株等を確認

2. 調査の概要

調査地は、平城宮の西面中門である佐伯門の西に位置し、佐伯門から西へ延びる一条南大路にかかり、その北の右京一条二坊四坪、南の右京二条二坊一坪にまたがります。また、水田の地割りなどから、この付近には平城京廃絶後の秋篠川の旧流路があったことが、試掘調査以前から指摘されていました。

調査区の基本層序は、旧庁舎の建設に伴う造成土（最大で厚さ約 2 m）、旧耕土・床土（20～30 cm）、中世の遺物包含層（20～30 cm）とつづきます。その下は場所によって土層が異なり、調査区南部では洪水の堆積とみられる灰色砂（10～20 cm）が広がります。調査区北部では、奈良時代の整地土が 20 cm 程度残る部分もあります。その下は明黄灰色～褐色粘土の地山となります。遺構はおよそ中世の遺物包含層の下、あるいは灰色砂の下で検出されました。遺構検出面は北部で高く、地表から約 1.3m 下（標高 68.6m 付近）、最も低い中央部で地表下約 2.5m（標高 67.5m 付近）です。

検出した遺構は、古墳時代から平城京造営直前までの秋篠川旧流路のほか、平城京造営期の遺構として秋篠川旧流路を踏襲しながら改修した斜行大溝があります。奈良時代の遺構には、一条南大路の南北両側溝と、大路を横断して、これらをつなぐ南北溝、大土坑、井戸 5 基などがありますが、顕著な建物跡などは見つかりません。その他、古墳時代以前の溝や、平安時代から近世までの井戸、中世の耕作に伴う細溝、小穴、時期不明の掘立柱列などを検出しました。

3. 検出遺構

A. 平城京造営前の遺構

秋篠川旧流路 調査区の中央を北西から南東に流れる自然流路。この流路の位置をほぼ踏襲して後述する斜行大溝が造られているため、検出したのは北東岸と南西岸の一部です。幅約 30m、検出面からの深さは約 3.5m あり、調査区内で西北西から南南東へと屈曲して流下しています。北東岸の土層観察によって、幾度となく浸食と堆積を繰り返していることがわかります。旧流路の堆積土からは、古墳時代を中心に弥生時代から 8 世紀初頭頃までの遺物（須恵器・土師器）が大量に出土しました。

その他の遺構 調査区北方を中心に南北大溝、これに注ぐとみられる東西溝 2 条、さらにこれらを覆う沼状遺構などを検出しました。これらの遺構は、弥生時代から飛鳥時代のものとみられます。下層遺構の調査から、この地域の自然地形は、佐伯門のある東側が高く、秋篠

川旧流路に向かって下がっていることがわかりました。今後、土壌サンプルから地質学的な分析をおこなうことで、平城京造営以前の旧地形の復原に資するデータを得ることができると考えています。

B. 平城京造営期の遺構

斜行大溝 秋篠川旧流路を踏襲する形で改修されたとみられる斜行溝。幅約15m、深さ約2.5mの直線的な溝で、約35m分を検出しました。溝底には薄い水成堆積層が認められます。また、一時的に激しい流水に見舞われることもあったらしく、埋土の中には数層の水成堆積層もあります。しかし、基本的な埋土は、ある程度乾いた状態で人為的に埋め戻された粘土ブロックを中心とし、長期にわたって水が流れていた様相ではありません。秋篠川旧流路から出土した遺物の年代から、この溝が存続した時期は、平城京造営段階と考えられます。この溝の埋め立てに際しては、後述する樹木の葉や枝等を敷いた敷葉・敷粗朶しきは しきそだ工法が用いられています。

敷葉・敷粗朶 斜行大溝を埋めるための敷葉・敷粗朶工法の遺構です。大きく3層に分かれており、枝（粗朶）を主体とする上層および下層と、葉を主体とする中層の3層に大別できます。中層と下層の敷葉・敷粗朶の検出面には、幹の太さが直径20～55cmの樹木の切り株が、両岸に沿って多数投棄されていました。樹種はムクノキやケヤキなどで、いずれも斧で幹を伐採し、根を切断した状態で発見されました。敷葉・敷粗朶には、二葉マツ類やアカガシ亜属などの樹種が含まれていることがわかっています。

中・下層の敷葉・敷粗朶を伴う埋め立て土が、ほぼ斜行大溝の全体にわたっているのに対して、上層の敷葉・敷粗朶とその上に盛り上げられた黒色砂質土は、基本的に後述する一条南大路の路床部分に限られています。黒色砂質土は、厚さ5～15 cm単位で積み重ねられており、人為的な造成土と考えられます。上層敷粗朶下の埋め立て土からは、ヒト、ウシ、ウマなどの足跡を多数発見しました。また、中層の敷粗朶層上面ではウマの下顎骨なども出土しています。

祭祀遺構 調査区中央付近では、斜行大溝を埋め立てた土の上面で、70点近い齋串が集中する遺構が見つかりました。溝の埋め立て工事の過程でおこなわれた祭祀に関連する遺構と考えられます。

C. 奈良時代の遺構

(1) 条坊関連遺構

一条南大路 調査区やや南寄りで見出した、平城宮の西面中門である佐伯門から西に延びる条坊道路。斜行大溝を埋め立てた後に造られており、路面は削平されていますが、路床部分が残っています。一条南大路の南北では、道路側溝となる東西方向の溝を検出しました。

両者の心の間距離は約25m(70大尺)で、道路の中軸が佐伯門の発掘調査の成果から想定された中軸線とほぼ一致することから、一条南大路の南北両側溝と認めることができました。

一条南大路北側溝 調査区中央やや南寄りで検出した東西溝。約38mを検出しました。溝には3時期の改修が認められ、改修によって位置を変え、溝幅も変化しています。造営当初の溝(北側溝A)は、幅2.0~3.5mと広がったと考えられます。続く北側溝Bは幅を約1.5mに狭めますが、南肩は北側溝Aの位置を踏襲します。さらに北側溝Cは、南に約3mずらした位置に掘り直されています。北側溝Cは調査区東寄りで東西約14mを検出しましたが、以西では削平されたと考えられます。

北側溝Aは調査区西部では、後述の沼状遺構が堆積した後に、再度掘り直されています。この沼状遺構には奈良時代中頃の土器を含みますので、それ以降の改修と考えられます。北側溝Bの埋土からも奈良時代中頃の土器が出土しており、北側溝Cからは奈良時代後半の土器が出土しました。

一条南大路南側溝 調査区南部で検出した素掘りの東西溝。一部、残存していない部分もありますが、長さ約32mを検出しました。後述する南北溝の合流地点より東では2時期の変遷がありますが、西では1時期の堆積しか確認できませんでした。合流地点より東で検出した当初の南側溝Aは、改修後の南側溝Bと一部重複するため幅が不明ですが、残存深さは約40cmあります。南側溝Bは幅約2.2mで、深さは約45cmが残存していました。これに対し、合流地点より西で検出した溝(南側溝C)は、溝幅1.8~2.0mで、深さは60cm程度です。

溝底の高さは、南北溝の合流地点を境に東西で大きく異なり、東が約70cm低くなっています。また、南側溝Aからは奈良時代中頃の土器しか出土しませんが、南側溝B・Cからは奈良時代後半の土器が出土しました。

南北溝 一条南大路を横断して、その北側溝と南側溝をつなぐ南北溝。埋土の堆積から、2時期の変遷があります。当初の南北溝Aは改修後の南北溝Bと重複するため、残存する幅は約70cm、深さは約80cmです。埋土には奈良時代中頃の土器を含みます。改修後の南北溝Bは幅約2.1m、残存する深さは約30cmです。埋土には奈良時代後半の土器を含みます。溝底の標高は一条南大路の中央付近で最も高いことを確認しました。また大路を横断するため、暗渠としていた可能性も否定できません。

しがらみ 北側溝A・Bの大路側にあたる法面(一条南大路北法面)には、しがらみによる護岸が施されています。径8cm前後の杭を約30cm間隔で千鳥に配し、その間に粗朶を編みつけてあります。しがらみは秋篠川旧流路を埋め立てた部分を中心に施されていますので、主として大路の北法面を保護する目的で施工されたと考えられます。

(2) 右京一条二坊四坪の遺構

井戸1 調査区東北部で検出した大型の井戸。井戸の掘方は、直径約5.8mの円形を呈する抜取穴によって、ほとんどが壊されていました。検出面から井戸底部までの深さは約3mあります。井戸枠の部材はほとんどが抜き取られていましたが、最下段の横板組のみ残存して

いました。残存する横板は長さ約2.2m、厚さ約6cmで、上下の接合は板の側面に互いにホゾ穴を穿ち、別材で作ったホゾを差し込んで横板どうしを井籠状に積む構造です。井戸枠内の底部には径3～5cmの円礫を約20cmの厚さに敷き詰めていました。それを除去したところ、中央には曲物を抜き取ったとみられる穴を検出しました。井戸枠の抜き穴からは、木簡や墨書土器、三彩瓦、磚などとともに、奈良時代後半の土器が出土しました。

このほか、四坪内からは、奈良時代の井戸が4基発見されています。四坪の南西寄りに検出した井戸2の抜き穴からは、「左兵下」と記された墨書土器が出土するなど、この坪の利用を考えるうえで興味深い資料も出土しました。

沼状遺構 調査区中央の西寄りには、均質な暗黒褐色の粘土が堆積していました。最も厚いところでは約50cmあります。一条南大路北側溝A・Bの大路側にあたる南法面（一条南大路北法面）より北方で、斜行大溝を埋め立てた範囲と重なるように、南北約15mに渡って不整形に広がっていました。一条南大路の北側溝Aを壊すように堆積しており、木簡や奈良時代中頃の土器が出土しました。以上から、奈良時代前半には、この一帯は粘土が堆積するような湿地状を呈していた可能性が高いと考えられます。この上面では、ヒトやウマの足跡を検出しました。

（3）右京二条二坊一坪の遺構

大土坑 調査区南部（一坪の東北隅）で検出した、東西約6m、南北約5m、深さ約60cmの土坑で、斜行大溝の埋め立て土を掘り込んでいます。埋土から奈良時代前半の土器や瓦などとともに、木簡が2点出土しました。この大土坑が埋まった後に、黒色の粘土が堆積していますので、右京一条二坊四坪と同様、一坪の東北隅も奈良時代前半には湿地状を呈していたと考えられます。

このほか、一坪内では、奈良時代の井戸1基や掘立柱列なども検出しました。

D. その他の遺構

井戸3 調査区東部で検出した、一条南大路の路面北縁近くに掘られた円形石組井戸。石組みの内径は約45cmで、底部にはほぼ同じ径の曲物が据えられていました。深さは約30cm程度しか残っていませんでした。11世紀前半の土師器皿が出土しており、この時期には一条南大路は当初の規模では機能していなかったと考えられます。

地震痕跡 すでに報道発表をおこなっているように、地震痕跡を数箇所を確認しました。液状化現象による砂脈や噴砂を、平面あるいは断面で確認したもので、噴砂が形成された土層で出土した遺物の年代から、歴史時代には奈良時代以降12～13世紀までと、13世紀以降の少なくとも2回は、液状化現象が発生するほどの地震があったことがわかりました。このほか古墳時代以前にも同程度の地震があったと考えられる痕跡を確認しています。

4. 出土遺物

土器・土製品 整理用コンテナ 241 箱分の土器・土製品が出土しました。調査区全体では弥生時代から中・近世までの土器が出土しましたが、秋篠川旧流路の埋土から出土した古墳時代の土器が大半を占めます。また、条坊関連遺構・京造宮関連遺構・整地土層からは、飛鳥時代末から奈良時代の土器が出土しました。これらの土器の帰属時期については、各遺構で述べたため省略することとし、ここではそれ以外の土器について、概略を記します。

奈良時代の特筆すべき土器としては、墨書土器・陶硯・転用硯が出土しました。墨書土器は約 60 点が出土しました。おもに沼状遺構と、条坊側溝や右京一条二坊四坪内の遺構から出土しました。判読できたものでは、「左兵下」、「内薬司」、「大伴千嶋」、「□□ [忌厨カ]」、「御□」、「老」、「竹田」、「東」、「林」、「供」などがあります。

瓦磚類 整理用コンテナ 267 箱の瓦磚類が出土しました。大半は奈良時代の瓦です。一条南大路の北側溝からは、丸瓦、平瓦のほか隅木蓋瓦が、南側溝からは、丸瓦、平瓦のほか、第一次大極殿所用の軒平瓦 6664C が出土しました。これら両側溝をつなぐ南北溝からも少量の丸瓦、平瓦が出土しました。井戸 1 からは奈良時代後半の軒瓦とともに、丸瓦、平瓦、三彩平瓦などが出土しています。斜行大溝を埋め立てた造成土にも少量の瓦片が含まれていました。

木簡 木簡は計 45 点（うち削屑 12 点）が出土しました。その内訳は、右京二条二坊一坪の大土坑から 2 点、一条南大路北側溝 B から 3 点、南北溝から 19 点（うち削屑 11 点）、右京一条二坊四坪内の沼状遺構から 1 点、同坪内の井戸 1 から 4 点（うち削屑 1 点）、斜行大溝を埋め立てた造成土から 16 点、です。このうち里制下（701～717 年）の荷札木簡が、右京二条二坊一坪の大土坑、一条南大路部分の中層敷葉層、一条南大路北側溝 B、右京一条二坊四坪内の斜行大溝を埋め立てた造成土から出土しています。このほか、習書木簡や文書木簡もあります。文書木簡には「奈良京」（平城京）と見えるものがあり、「平散（薬物か）」を運ぶ役夫（駟使丁）が逃亡したことが書かれています。「奈良京」という言葉の使用とともに、平城京と藤原京を対比的に用いているとみられることから、平城遷都前後の様子を伝える木簡としても注目されます。

木器・木製品など 約 1,100 点の木器・木製品が出土しました。このうち、井戸枠部材などの大型木製品は約 300 点です。南北溝中央付近からは、多量の加工棒、薄板とともに人形 1 点、斎串 3 点が出土しています。斜行大溝の埋め立て土の上面で見つかった祭祀遺構からは、70 点近い斎串や横楡形木製品 1 点が折り重なって出土しました。斎串は長いもので 60cm 以上あり、ほとんどが 7 世紀第Ⅲ四半期には出現するとされる両端を山形に削り出すものです。これらの斎串の中には、片側の端面を山形につくり、反対側は一方向から斜めに切り落とし、側面を削り込むという珍しい形状のものもあります。

また、右京二条二坊一坪の井戸からは、多数の加工棒とともに刀子柄 1 点や箸 2 点が、大土坑からは挽物椀 1 点、曲物 1 点が出土しました。さらに、調査区中ほどの沼状堆積からは、挽物と考えられる高さ 4.7cm の黒漆塗の薬壺が 1 点出土しています。

5. まとめ

平城京の条坊遺構を発見 中世以降の耕作や秋篠川の氾濫などによって、奈良時代の遺構面は削平を受けている部分も多いのですが、平城宮の西面中門である佐伯門から西に延びる一条南大路の南北両側溝を検出しました。大路の幅は側溝心心間で約 25m (70 大尺) であり、朱雀大路、二条大路に次ぐ規模で、平城京の大路の規格に適うものであることを追認しました。また、この両側溝をつなぐ南北溝を検出しました。こうした溝が平城京内の大路で検出されたのは初めてであり、その機能については今後の課題です。これらによって、佐伯門前の条坊の実態が判明し、平城京の都城制あるいは排水の計画を考えるうえで重要な情報を得ることができました。

また、今回みつかった一条南大路の南北両側溝は、既往の発掘調査で確認した西一坊大路西側溝とは、1 m 近い標高差があります。つまり、想定よりも深い位置に遺構が残っていたのです。今後は西一坊大路西側溝との接続の仕方や排水計画等を解明するために、さらに広い範囲にわたる検討が課題となりました。

平城京造営期の大規模な土木工事の様相が判明 平城京造営期には、秋篠川旧流路は、改修されて斜行大溝となりますが、これを埋める際に敷葉・敷粗朶工法等を用いた大規模かつ入念な造成をおこなっていたことが判明しました。敷葉・敷粗朶工法は、3層にわたって施工され、とりわけ一条南大路の下では、さらに丁寧に敷粗朶を施工しています。

敷葉・敷粗朶工法に用いられた多量の樹木については、各地点でサンプリングをおこないました。詳しい樹種同定や分析は今後おこなう予定ですが、これらが平城京造営前の、この地域一帯の自然環境や景観の復元に、重要なデータを提供するものと期待されます。

現在の秋篠川は平城京の条坊に沿う形で北から南に流れており、平城京の造営に伴って付け替えられたことが指摘されていましたが、河道付け替え工事の実態が明らかになったのは、今回が初めてです。古代国家による一大事業としておこなわれた平城京造営の計画性と造営工事の実態を明らかにすることができました。